

# 種による提喩は換喩なのか？ —種による提喩の背景にある2種類の推論—

大田垣仁

## 1. はじめに

以下は提喩をふくむ文である。

- (1) a. スーパーで卵〈鶏卵〉を買ってきて。／寒空から白いもの〈雪〉が降ってきた [類による提喩]
- b. もう、ごはん〈食べもの全般〉たべた？／花子はこの村の小町〈美人〉だ [種による提喩]

このように、ふたつのカテゴリー X と Y が  $X \subset Y$  のとき、Y の形式で X を意味し、指示対象が X の外延に縮小する現象や、逆に X の形式で Y の外延が総称される<sup>1</sup>現象を提喩（シネクドキー、Synecdoche）という。特に前者を類による提喩、後者を種による提喩という（佐藤 1978、瀬戸 1997、森 2001 などを参照）。

本稿では、提喩の中でも特に種による提喩を主な分析対象とする。種による提喩は類による提喩にくらべて生成条件が厳しく、生成メカニズムにも不透明な部分が多い。また、類による提喩がその名のとおり Synecdoche 〈同時理解〉としての特徴をもち、“卵を買ってきて”に限定修飾をほどこした“新鮮な卵を買ってきて”が〈新鮮な鶏卵を買ってきて〉を意味しうるのにたいして、種による提喩“もう、ごはんたべた？”に限定修飾をほどこした“もう、炊きたてごはんたべた？”における“ごはん”は〈食べもの全般〉を意味しえない。語レベルで生じる種による提喩のこのような特徴は、名詞句に生じる換喩について、いったん換喩が成立するとトリガー<sup>2</sup>属性をあらためて付与できないことに似ている（e.g. \*くいにげしたかつ井にはトンカツが5きれのっていた）。そもそも、この“ごはん”が〈食べもの全般〉を意味しているかも実は不透明である。一方、文／句レベルで生じる種による提喩を観察したとき、それが提喩のようにも換喩のようにもみえ判断に迷うことがある（e.g. 石橋をたたいてわたる）。これらの現象に対して、種による提喩の分析

に深い関連がある研究として、佐藤 (1978)、Kövecsses and Radden (1998)、Croft (1993 = 2002)、山泉 (2010)、Carston (2002) を概観し、これらの研究が種による提喩の把握についてさまざまな示唆をあたえるものの、文から語にわたる種による提喩の生成メカニズムを包括的にとらえるには不十分であることを指摘する。そのうえで、種による提喩の生成メカニズムが命題間の推論に生じる認知バイアス (i.e. 十分性の手がかり、後件肯定の誤謬) として説明できることを述べる。これによって、種による提喩は2つのタイプ (i.e. 十分性の手がかりがかかわる Type1 と後件肯定の誤謬がかかわる Type2) に類型化できる。この観点を足がかりに、種による提喩と換喩の類似と相違について語レベル、文/句レベルの両面から分析する。結論として、語レベルの換喩と種による提喩は指標にもとづくいいかえである点で類似しているが、Type1 の推論が発現するかどうかの点で種による提喩のほうが生成条件が厳しいこと、文/句レベルの換喩と種による提喩は、因果関係を共通点として、その関係のどこに着目するかによって提喩とも換喩ともとれることを述べる。

本稿のあとにつづく構成はつぎのとおりである。2節で種による提喩の類型を文/句レベルと語レベルで記述的に観察する。3節で種による提喩をめぐる先行研究を概観する。4節で種による提喩の背景にある推論を明らかにする。5節で種による提喩がかかわるその他の事例についてふれる。6節で種による提喩と換喩の類似性と相違性について整理する。7節は全体のまとめである。

## 2. 種による提喩の類型

分析に先だち、種による提喩の類型を整理しておきたい。一般に、類による提喩にくらべて種による提喩は事例があまりみられないとされるが、文 (または句) レベルおよび語レベルで一定の類型を見いだすことは可能である。

### 2.1. 文または句レベル [定型表現]

まず、文または句レベルでは定型的な表現として種による提喩を動機づけとするものが確認できる。

- (2) a. お茶をする〈休憩する〉
- b. 石橋をたたいてわたる〈十分用心して事にあたる〉

- c. 乳と蜜の流れる大地〈約束の地〉(旧約聖書)

## 2.2. 語レベル

つぎに、語レベルでは意味が化石化した要素として語や語の一部にあらわれるもの、種による換称とよばれる固有名詞の普通名詞化によるもの、固有名詞の普通名詞化に関連するものとして商品名の一般化がみられる。また、程度概念をあらわす名詞においてその程度の命名が大きな量をあらわす名称にかたよる事例や、数の提喩と呼ばれる基本的な数による小さな量や大きな量の把握も種による提喩の一種とみなせる。

- (3) a. [化石化した要素] 下駄〈履き物〉箱、筆〈筆記用具〉箱、レコード店、写メ、南京 {豆、虫、錠}、茶碗  
 b. [種による換称；固有名詞の普通名詞化] 小町〈美人〉、土左衛門〈溺死人〉、筒井順慶〈日和見主義者〉、ドン・ファン〈好色者〉、銀座〈繁華街〉  
 c. [商品名] バンドエイド、セロテープ、魔法瓶、ウォークマン、エスカレーター、kleenex  
 d. [程度概念] 高さ、重さ、長さ  
 e. [数の提喩] 1人もこなかった、千里の道も一歩から

## 2.3. 文／句レベルなのか語レベルなのかあいまいな例

一方で、以下の例は種による提喩がどの言語単位で起きているのかあいまいな例で検討が必要である。

- (4) {朝、昼、晩} ごはん／もう、ごはんとべた？

## 3. 種による提喩をめぐる先行研究

ここでは、種による提喩の分析に深い関わりがある研究について概観したい。とりあげるのは、佐藤信夫(1978)の提喩論、Kövecsses and Radden(1998)のPrinciples governing the selection of the preferred vehicle、Croft(1993 = 2002)のDomain Matrix / ConstructionとDomain Highlighting論とそれを種による提喩の分析に応用した山泉(2010)、Carston(2002)のアドホック概念構築である。

### 3.1. 佐藤信夫(1978)の提喩論

レトリック研究において佐藤(1978)の慧眼としてよく知られているのは、古典

レトリックにおける伝統的な提喩観から部分-全体関係にもとづくものを換喩として切りはなし、カテゴリーの包摂関係にもとづくもののみを提喩として再定義したことである。このとき提喩は上位カテゴリーをあらわす語や句で下位概念やその指示対象を意味したり指示したりする類による提喩 (e.g. 卵かってきて) と種による提喩 (e.g. もう、ごはんたべた?) に下位分類されるが、この提喩論を吟味すると、類による提喩についての言及にくらべて種による提喩についての言及がすくなく、わずかに聖書の一節 (ie. “乳と蜜の流れる大地”) や人名や商品名による換称が紹介されるのみである。佐藤の遺稿を編集した『レトリック事典』(2006: 268-70) に立項されている提喩の解説においても種による提喩の存在については先行研究をひきつつ懐疑的な部分があり、種による提喩は提喩としての存否がゆらいでいると考えられる。

### 3.2. Kövecsses and Radden (1998) の Principles governing the selection of the preferred vehicle

一方、1990年代以降に認知意味論の分野で換喩研究が盛んになり、そのさきがけとなった Kövecsses and Radden (1998) では換喩の使用にあたってトリガーとして選択にかかわる事物のくみあわせについて類型化しており、このなかには種による提喩の生成にかかわる以下の類型も提示されている (認知意味論では古典レトリックの伝統を継承しているのか換喩と提喩を連続体としてとらえることがおおい)。まず、Perceptual selectivity として、

(5) MORE OVER LESS

How *tall* are you ?

(6) DOMINANT OVER LESS DOMINANT

*man / England / America*

(7) SPECIFIC OVER GENERIC

*The / a spider* has eight legs

*Every Tom, Dick and Harry*

つぎに、Cultural preferences として、

(8) IDEAL OVER NON-IDEAL

Paragons : *Babe Ruth / You are a Judas.*

## (9) BASIC OVER NONBASIC

I have told you *a hundred* times.

## (10) COMMON OVER LESS COMMON

*aspirin*

(Kövecsses and Radden 1998 : 62-9)

がしめされている。これらの principles は種による提喩がうまれる条件に筋道をあ  
たえてくれるが、この枠組みからはずれて種による提喩が生まれるかどうかは不透  
明であり、またこの枠組みに合致していても必ずしも種による提喩が生じるわけ  
でもないので、一定の傾向を示すものにとどまるだろう。

### 3.3. Croft (1993 = 2002) の Domain Matrix / Construction と Domain Highlighting, 山泉 (2010)

種による提喩の成立にかかわる認知意味論からのことなるアプローチとしては、  
Croft (1993=2002) による Domain Matrix / Construction と Domain Highlighting  
をもちいた考察がある。これは語彙項目と概念の関係を把握するためのモデルであ  
るが、特に隠喩や換喩がもつ特性を説明することに主眼をおく。すなわち、われわ  
れの百科事典的な知識の中には、任意の語彙項目から想起される Domain (i.e. 知  
識の単位、概念) 群の範囲である Domain Matrix があり、そこから連想的に関連  
する知識や指示対象が語の解釈にひきだされる (Domain が Highlighting される)  
という考え方である。これを Croft (1993=2002) はアルファベットの “T” を例と  
して紹介している。Croft (2002 : 170) の図をもとにこれを簡易的に整理すると次  
のようになる。Domain Matrix は一見、タクソノミー的構造に見えるがそうでは  
なくリゾーム的な構造を持ち、この簡易表記では表現できない概念間の飛躍的な接  
続がある (図 1 参照)。

- (11) T - T [alphabet [writing system [writing [communication [time, force, human  
beings [living things [life, physical objects [matter, location [space], shape]],  
mind], meaning], vision]]]]]

(Croft 2002 : 170 をもとに作成)

Croft はこのモデルをもちいることで隠喩や換喩をふくむ表現ををわれわれがどう  
理解できるかを述べている。たとえば、“プルーストを読む” という換喩はプルー

ストという固有名から〈プルースト〉を構成する Domain Matrix が想起され、そこから文脈や述語のはたらきによって、〈プルースト〉の主たる概念である〈作家〉が想起され、さらにそこから〈本〉、〈本の内容〉が想起されることでこの表現の解釈が可能になるとする。これが Croft のいう Domain Highlighting である。

(12) Proust-PROUST [writer] [human beings, book [object, content]]

Croft (1993 = 2002) では (佐藤が規定するものとしての) 提喩についての直接的な言及はないが、このモデルをもとにして種による提喩の成立メカニズムを分析した研究として山泉 (2010) がある。山泉 (2010) は、Croft の Domain Highlighting を使って、種による提喩 (e.g. 人はパンのみに生きるにあらず) も換喩と同様に Domain Highlighting のモデルで説明できるとする。

(13)           パン (←→米飯)  
                  |  
          {{[食]: [主食] [おかず]} [衣][住]} [精神的充足]  
                                  |                  |  
                                  [生                  存]

(山泉 2010: 291)

この図式では、〈パン〉の概念から〈主食〉概念が想起され、〈主食〉概念から〈生存〉概念が想起されることで〈食の充足〉に対する〈精神的充足〉が想起され、この表現が理解されたとする。しかし、このモデルも山泉自身が「ドメイン・ストラクチャーが、分析に都合の良い形で作り上げられている」(山泉 2010: 294) と指摘するように、そもそも Croft のいうドメインがそもそも何であるか<sup>3</sup>や、Domain Matrix / Construction の全貌があきらかでないところに課題がのこる。おそらくこれは、そもそも人間がもつ知識とはいかなるものであるか、という大きな問題にかかわってくるのだろう。

### 3.4. Carston (2002) アドホック概念構築

以上、種による提喩にかかわる認知意味論からの考察をみてきたが、一方で語用論 (関連性理論) においても種による提喩の生成や理解にかかわるモデルが提示されている (Carston 2002)。これは、アドホック概念構築とよばれる。アドホック概念構築とは言語表現の使用とその理解において、その表現の厳密な定義を臨時的にゆるめることでその表現の使用と理解が可能になるとするものである。森 (2019) は Carston (2002) が提案したアドホック概念構築と提喩とのかかわりに

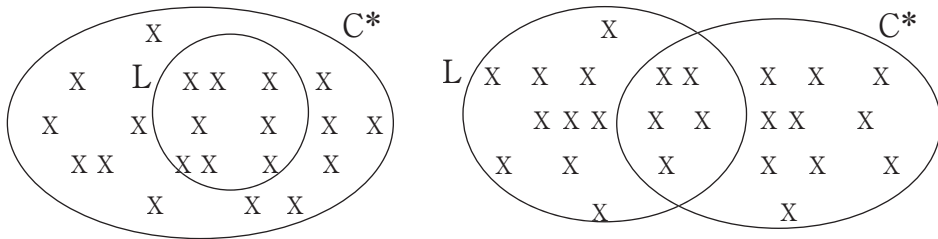
ついでに言及している。その中で種による提喩がアドホック概念構築における拡張 (broadening) 1 と拡張 2 に対応しているとする (拡張 3 は隠喩の解釈に対応)。以下の例をみてみよう。

- (14) a. There is a *rectangle* of lawn at the back.
- b. This steak is *raw*.
- c. On Classic FM, we play *continuous* classics.

(Carston 2002 : 328)

これらの例は厳密な意味では偽の言明になる。すなわち、芝生は〈四つの内角がすべて直角である四辺形〉といった数学的な意味での長方形ではなく、ステーキは完全に生ではなく、FM 放送はクラシック音楽を途切れることなく配信しているわけではない。が、アドホック概念構築によって斜体でしめた語の概念を拡張することによって、文の解釈が可能になっている。この拡張では、語彙項目 L の外延がアドホック概念構築によって、アドホック概念 C\* のものにまで拡張されたり (拡張 1)、語彙項目 L とアドホック概念 C\* が部分的に外延を同じくする (拡張 2)。

- (15) 拡張 1 [左図] と拡張 2 [右図]



(Carston 2002 : 343)

Carston によると、拡張 1 と拡張 2 の違いは、ある語彙項目の外延が単に拡張されるばあいは拡張 1 になり、語彙項目の外延がアドホック概念の外延に含まれないことがあるばあいは拡張 2 になるという。

アドホック概念構築における拡張 1 と拡張 2 は、種による提喩のメカニズムに一定の示唆をあたえるが、語彙項目の外延がひろがることを前提とするために唯一的な値しかもたない固有名詞がトリガーになるタイプの種による提喩を説明することができない。

#### 4. 種による提喩の背景にある推論

以上の先行研究をふまえ、本節では種による提喩にかかわる推論と認知について、文レベルから語レベルまでを一貫して説明できるモデルを提案する。述語論理によって表示できる命題やイベント間の論理関係に“充分性の手がかり”や“後件肯定の誤謬”が認知バイアスとしてはたらくことが種による提喩の生成と理解の基盤になることを述べる。

##### 4.1. “ごはん”の謎

つぎの例文をみてみよう。

(16) a. もう、ごはんたべた？

b. 花子はこの村の小町だ。

これらはいずれも種による提喩の例で、“ごはん”で〈食べもの全般、食事〉を、“小町”で〈美人〉をあらわしている。これらの例には提喩のトリガーが普通名詞か固有名かというちがいがあある。“(小野)小町”の例は固有名詞が普通名詞化することで、〈美人全般〉をあらわすようになり、このプロセスに種による提喩が生じている。一方、“ごはん”の例は文のどこに提喩が生じているかがあいまいである。[朝、昼、晩] ごはんということばがあるように、“ごはん”という語は〈それぞれの時間帯における食べもの全般〉を意味しているが、“もう、ごはんたべた？”の“ごはん”に“食べもの全般”を代入した“もう、食べもの全般たべた？”は文として不自然な印象をうける。むしろ、この例は名詞の位置に提喩が生じているというよりは、“もう、ごはんたべた？”という文全体が〈もう、食事をしたか？〉ということの意味しているようにみえる。ここに語の意味のみで提喩を考えることの限界があると考えられる。これに対し、あらためて佐藤の提喩論をふりかえると、提喩は語や文の論理関係が生成や理解の基盤になるとしていた。となると、フレーゲ的に考えれば提喩については語レベルのみや、語レベルからボトムアップで文レベルの提喩を分析するよりも、文とその要素としての語という視点から出発し、文どうしにある論理関係を基準に語レベルで生じる提喩のしくみについても説明できるモデルを構築することがのぞましいのではないだろうか。結論をさきどりすれば、簡易的な述語論理の記法と、認知バイアスの視点を導入すれば、文レベルから語レベルの提喩を一貫してとらえられるとともに、種による提喩の動機づけが



十分性の手がかりにもとづくタイプと後件肯定の誤謬にもとづくものにわかれることがあきらかにできる。

#### 4.2. 文どうしの論理関係と認知バイアスから提喩をみる

まず、記法について整理しよう。“ごはん”の例をもちいると、日本の言語文化においては、

(17) ある人物  $x$  がごはんをたべているならば、その人は食事をしている  
 ということになる。このとき、〈ごはんをたべる〉というイベントを  $P$  とし、〈食事をする〉というイベントを  $Q$  とすると、(17)の関係は述語論理によってつぎのように表示できる。

$$(18) \exists x [P(x) \rightarrow Q(x)]$$

種による提喩を成立させる種類のひとつは、このような推論において、 $P(x)$  が“実質的な”十分条件とみなされるばあいである。これを坂原 (1985) は“条件の階層化”といい、認知心理学や誤謬論理学では“十分性の手がかり”や“十分性の原則への違反”という (ウーキョン 2023、デイマー 2023)。すなわち、われわれは日常的な推論のなかで任意の出来事の原因を別の出来事にもとめるが、因果関係において“真の原因”を特定することは困難であり、みずからの知識や判断のなかで、想定される原因のなかで特に原因と信じるものをあたかも十分条件とみなす。これが、条件の階層化、十分性の手がかり、十分性の原則への違反である。このとき、(18)の論理式は個人レベルで種による提喩が生じていることをあらわしているが、この推論が任意の集団レベルで常識となれば、“ $P$ ：ごはんを食べる”で“ $Q$ ：食事をする”を換喩的にいいかえられるようになるのである<sup>4</sup>。この推論はつぎのように表示できる。

$$(19) \forall x [P(x) \rightarrow Q(x)]$$

この推論で注意が必要なのは、このばあいの $\forall$ は全称ではなく総称であり、例外が発生するということである。

以上の推論は人間の認知バイアスに依存しており、文化依存でもある<sup>5</sup>。このような十分性の手がかりが推論にかかわるタイプの種による提喩を仮に Type1 (の種による提喩) としておく<sup>6</sup>。

つぎに、種による提喩の成立に後件肯定の誤謬がかかわるタイプについて考え

る。これを Type2 (の種による提喩) としておく。後件肯定の誤謬は詭弁の動機づけのひとつとしてよく知られているものだが、つぎのような“条件的前提における後件を肯定したうえで、結論で前件を肯定すること”(デイマー 2023: 127-8)をいう。

(20) もし A ならば B である (前提)

B である (前提)

したがって、A である (結論)

たとえば、

(21) もしある人物が女王ならば、その人物は女である (前提)

エミリーは女である (前提)

エミリーは女王である (結論)

といった推論に後件肯定の誤謬が生じている。種による提喩の Type2 にはこの誤謬が生じているものと考えられる。“小町”を例に考えると、

(22) もしある人物が小町ならば、その人物は美人である

花子は美人である

花子は小町である

という推論である。このとき、固有名詞“小町”は結論において述語として使用されることで、個体の同一性を述べるものとして解釈するか、固有名詞を普通名詞として解釈して〈小町がもつ属性の一部=美人であること〉を述べるものとして解釈することになる。このとき、種による提喩における解釈は後者である。このように、種による提喩の要因として後件肯定の誤謬を想定することによって、固有名詞をトリガーとする種による提喩の動機づけ (i.e. 固有名詞の普通名詞化) を説明することが可能となる。

#### 4.3. 種による提喩の萌芽

ちなみに、トリガーとなる固有名詞に何が選ばれるかについては、まさに、Kövecsses and Radden (1998) がしめした principles がかわってくるように思われるが、一般的にこのタイプの種による提喩は語として定着した“小町”や“土左衛門”などをのぞけば、

(23) {場所、時間} の N 〈固有名、商品名〉

のような枠ぐみをもつパラメーターつきの提喩表現としてあらわれる（大田垣 2020）。

- (24) a. 浪速のモーツァルト（＝名詞句全体で作曲家の「キダタロー」を指す）  
 b. 紀州のドンファン（＝名詞句全体で資産家の「野崎幸助」を指す）  
 c. 21世紀の裕次郎（＝名詞句全体で俳優の「徳重聡」を指す）  
 d. 令和のキャッツアイ（＝名詞句全体で新宿歌舞伎町のホストから多額の現金を盗んだ女性2人を指す）  
 e. 下町のナポレオン（＝名詞句全体で麦焼酎「いいちこ」を指す）  
 f. 東洋のカスバ（＝名詞句全体でかつて香港にあった「九龍城砦」を指す）

（大田垣 2020：92）

これらの事例は固有名詞や商品名に場所や時間といったパラメーターがつくことで普通名詞化と特定個体への限定が生じる。これらの解釈プロセスの背景には、Type2の推論がある。実際の言語使用を観察すると、語レベルの種による提喩が裸名詞で用いられるのはまれで、このような“名詞1 + の + 名詞2”の例や、限定修飾要素をとる例（e.g. 戸越銀座）や、限定修飾要素に種による提喩が生じる例（e.g. 下駄箱、南京錠）が一般的である。ここからみえてくることは、{場所、時間} + N〈固有名、商品名〉という枠組みによってType2の種による提喩は開かれており、言語外の実事とこの枠組みが合致したときに、Type2が成立するということである。つまり、いま仮に“豊橋の田中弘”という言明をこころみたときに、これは種による提喩としては無意味に見えるかもしれないが、これが無意味になるかどうかは言語使用に内在する可能性のなかにある<sup>7</sup>。つまり、この言明を可能にする土壌は、この枠組みがあることによってType2による推論につながるフックとしては開かれており、そのためにこの形式にはレトリックとしての創造性が宿っているように思われる。

## 5. その他のケーススタディー

前節で種による提喩にかかわる推論と認知について、文レベルから語レベルまでを一貫して説明できるモデルを提案した。ここでは、このモデルをもとに種による提喩がかかわっているように見えるいくつかの事例について考えたい。とりあげる

のは“スタバなう”と“ごはん論法”である。

### 5.1. “スタバなう”と種による提喩

まず、“スタバなう”であるが、しばしばX（旧 twitter）などのソーシャル・メディアで“スタバなう”と書かれた投稿をみかける。これは語用論的に多様な解釈が可能ではあるが、ひとつの文字どおりの意味としての解釈をこころみると〈いま、スターバックスにいる〉ということになる。このときスターバックスで購入した飲料の写真が同時に投稿されることがおおい。一方で、この“スタバなう”はソーシャル・メディアでのジョークとしてスターバックス以外に自分があるばあいにももちいられることがある。たとえば、ドトールコーヒーで撮影したコーヒーの写真に“スタバなう”とそえて投稿するのがこれにあたる。これは客観的には偽の言明になるわけだが、レトリック（ie. 競合店にいるのにスターバックスにいると称する）としては成立しており、それを可能にする動機づけに種による提喩がかかわっていると推察される。つまり、“P：スタバにいる”、“Q：カフェにいる”としたときに、Type1の種による提喩の解釈が生じているのである。いったんこの推論がみとめられれば、カフェはどこであってもよい<sup>8</sup>。

これは固有名詞がかかわっているために、一見、Type2の推論によって処理できそうに見える。しかし、筆者の直感としては、ここにはより複雑なプロセスをへたいいかえが生じているように思われる。具体的には、これがもし“ドトールなう”（以下、“ドトールにいる”とする）ではなく、“カフェなう”（以下、“カフェにいる”とする）という言明のいいかえならば、後件肯定の誤謬によるType2の推論が可能である。すなわち、

(25) もしある人物がスタバにいるなら、その人物はカフェにいる

太郎はカフェにいる

太郎はスタバにいる

このとき後件肯定の誤謬にもとづくType2の推論によって第3命題の述語名詞に固有名詞の普通名詞化が生じうる。ただ、いま問題になっている言明は、“カフェにいる”ではなく“ドトールにいる”のいいかえとしての“スタバにいる”である。このばあい、(22)の“小町”の推論とくらべて、上記の推論は以下のような奇妙なものになり、Type2では処理できなくなる。

(26) もしある人物がスタバにいるなら、その人物はカフェにいる

太郎はドトールにいる

太郎はスタバにいる

これが Type1 の十分性の手がかりにもとづく推論なら処理可能である。この推論は、多少のパラフレーズを施すと、つぎようになる。

(27) もし（特に）ある人物がスタバにいるなら、その人物は（十分に）カフェにいる（ことになる）

ここから、

(28) カフェにいることが真であるためには、スタバにいれば十分である

という認識が発生する。この段階を間にはさむことによってはじめて、“ドトールにいる”のかわりに“スタバにいる”という飛躍のないいいかえが可能になると考える。

## 5.2. “ごはん論法”と種による提喩

一方で、近年、政治家による詭弁の手法として話題にのぼる“ごはん論法”は、種による提喩の使用が前提となるコミュニケーションを聞き手に対して合意形成なしにキャンセルするものである。具体的には、つぎのようなものである。

(29) 法政大学の西充子教授が命名した、姑息な問題すり替え論法。「朝ご飯を食べましたか」と質問された場合、パンを食べていても、あたかも「ご飯（白米）」について問われたかのように論点をずらして、「食べていない」と強弁する論法。国会で繰り返されているごまかしやすすり替えのやりとり。

（現代用語の基礎知識 2020 年デジタル版）

このような論法は Type1 の種による提喩があらかじめ成立していることがコミュニケーションの前提となっており、論法が成立するためのそもそもの条件になっている。

## 6. 種による提喩と換喩の類似性と相違性

最後に、種による提喩と換喩の類似性と相違性について考察する。文／句レベルでの把握を基準としたとき、提喩と換喩の区別があいまいになり、提喩とも換喩ともどちらともとれる事例がある。また、語レベルでみたときにも文のふるまいにお

いて両者に類似がみられる。この現象を足がかりに種による提喩と換喩の類似性と相違性がどこから生まれるのかをモデル化する（図2、図3）。

### 6.1. 文レベルにおける区別のあいまいさ

佐藤（1978）によって語レベルで生じる提喩はカテゴリーの包摂関係にもとづく比喩として換喩から区別されたが、提喩の動機づけを命題間の推論としてとらえるとき、文／句レベルで生じる換喩との区別があいまいになる。たとえば、

(30) 石橋をたたいてわたる

という表現は〈十分用心して事に当たる〉という意味のことわざであるが、これは Type1 の種による提喩としてとらえることもできるし、一方で〈十分用心して事に当たる〉ことを原因とし〈石橋をたたいてわたる〉を結果としたときに結果で原因を言いかえる、句レベルの換喩とも解釈できる。また、

(31) お茶をする

という表現は〈休憩する〉という意味でもちいられ、原因で結果を言いかえる句レベルの換喩として紹介されることがあるが、これも〈お茶をする〉ことと〈休憩する〉ことを Type1 の種による提喩の関係でとらえることも可能である。つまりこれらの表現の中では提喩性と換喩性がまざりあっているのである。

### 6.2. 語レベルでの類似性

一方、語レベルで生じる種による提喩については、トリガーに固有の属性がターゲットに引き継げないという類似点がみられる。

(32) a. \*食い逃げしたカツ丼にはロースカツが5きれのっていた。[換喩]

b. ?もう、炊きたてごはんたべた? [種による提喩]

“食い逃げしたかつ丼”のような、名詞句の指示対象がその名詞句に関連する別の物に変わるタイプの換喩では、いったん換喩が成立すると、トリガーの属性（i.e. “ロースカツが5きれのっていた”）についてあらためて言及することができなくなる。これと同様に種による提喩のばあいも、いったん提喩が成立するとトリガーにしかつかない属性を付与することができない。つまり、“ごはん”のばあい、これを“炊きたてごはん”にするとトリガー（i.e. 米を炊いた食品）としての解釈にしなければならない<sup>9</sup>。

### 6.3. 種による提喩と換喩の類似性と相違性

以上から帰納できるのは、

- (3) 語レベルにおいて、換喩がなんらかの指標にもとづくカテゴリー間のいいかえ<sup>10</sup>であることに對し、種による提喩は Type1 の推論を前提とした、下位カテゴリー要素間での指標の選択と上位カテゴリーに対する総称をおこなう点に固有の性質があらわれる。

ということである。これは広義においては換喩も種による提喩もターゲットのトリガーによるいいかえ現象であり、これは換喩的な特徴といえるのだが、そのいいかえに種による提喩にはよりつよい制約がはたらくということである。この特徴は語レベルの種による提喩に顕著にあらわれる。大田垣（2017）でしめしたように、名詞句に生じる換喩は任意の限定された状況において“対応と対比の関係”を設定できれば生成が可能である。たとえば、〈注文品と客〉という対応関係があり、それぞれの対応関係のなかに注文品 {うどん、そば、ラーメン}、客 {x、y、z} という対比関係があるとき、x をうどん、y をそば、z をラーメンと呼ぶことができる。これに對して、種による提喩は換喩における対応の関係がカテゴリーの上下関係でなければならないうえに、対比の関係において当該のカテゴリーにおける下位カテゴリーの成員間で Type1 または Type2 の関係にもとづくトリガーの発見的選択<sup>11</sup>が必要で換喩よりも生成の条件が厳しい（図2参照）。

一方で、文レベルで生じる種による提喩と換喩については、命題間に因果関係がみとめられるとき、認知的にきわだつ一方を指標として他方をいいかえるという側面に注目すればそれは換喩的であり（図3右）、Type1 的な性質を中心に現象をみれば提喩的ということになるので（図3左）、このような表現は提喩でもあり換喩でもあると規定したほうがより正確に現象を把握できると考えられる。

以上のことから、“種による提喩は換喩なのか”という問いの解は、それを語レベルでみるか文レベルでみるかで状況がかわり、この解像度で提喩を見つめなおしたとき、提喩と換喩の間には佐藤（1978）や瀬戸（1997）の枠組みでは説明できない連続性が内在していることがわかるだろう。

## 7. おわりに

本稿では以下のことを述べた。

- (34) a. 種による提喩について、文レベルで生じるのか語レベルで生じるのかあいまいなものがみられるが、種による提喩の動機づけを命題間の推論にもとめることで、これらを包括的に説明することが可能になる。
- b. このとき、種による提喩は“充分性の手がかり”にもとづく Type1 と、“後件肯定の誤謬”にもとづく Type2 にわかれる。
- c. Type2 によって、固有名詞の普通名詞化のメカニズムを説明することが可能になる。
- d. 語レベルの換喩と種による提喩は指標にもとづくいいかえである点で類似しているが、Type1 の推論が発現するかどうかの点で種による提喩のほうが生成条件が厳しい。
- e. 文／句レベルの換喩と種による提喩は、因果関係を共通点として、その関係のどこに着目するかによって換喩とも提喩ともとれる。



図版

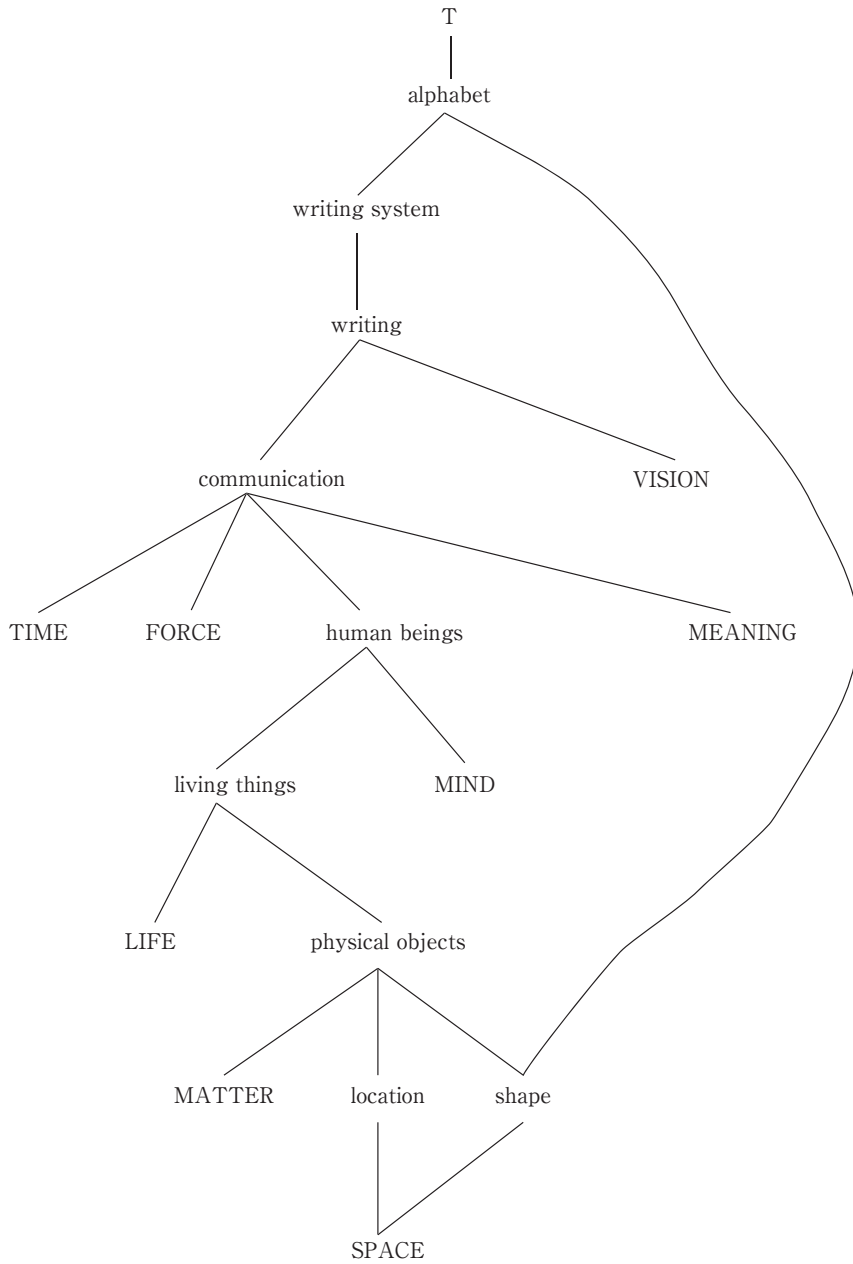
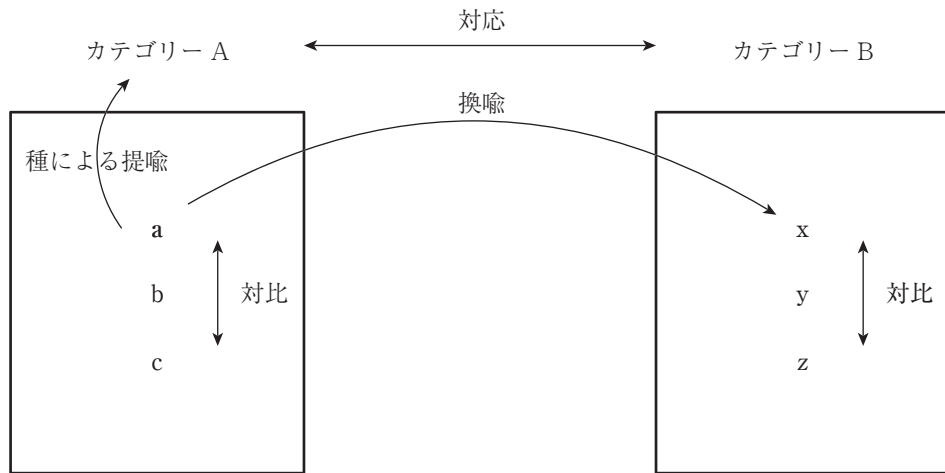


Figure 1. Domain matrix underlying the concept of the letter T

(図1 : Croft の Domain matrix)



(図 2：語レベルの換喩と種による提喩の関係)



(図 3：文／句レベルの種による提喩 [左図] と換喩 [右図] の関係)

## 参考文献

- ウーキョン, アン. [著], 花塚恵 [訳] (2023): 『イェール大学集中講義 思考の穴——わかっていても間違える全人類のための思考法』, ダイアモンド社.
- 大田垣 仁 (2017): 「換喩と種差——換喩使用の目的と条件——」『語文』第 109 輯, 1-19, 大阪大学国語国文学会.
- (2020): 「比喩が介在した“N1 の N2”型名詞句について」『語文』115, 1 – 21, 大阪大学国語国文学会.
- (2022): 「提喩性について – 語用論的コネクターから提喩をみる」『語文』116 – 7, 58-74, 大阪大学国語国文学会.
- 笠貫葉子 (2019): 「複合的比喩「メトニミーからのメタファー」の成立基盤と分類について」『メタファー研究 2』(鍋島弘治朗 [他編]), 171-91, ひつじ書房.

- 楠見 孝 (1995) : 『比喩の処理過程と意味構造』, 風間書房.
- 坂原 茂 (1985) : 『日常言語の推論』, 東京大学出版会.
- (1993) : 「条件文の語用論」『日本語の条件表現』(益岡隆志 [編]), 185-201, くろしお出版.
- 佐藤信夫 (1978) : 『レトリック感覚—ことばは新しい視点をひらく—』, 講談社.
- 瀬戸賢一 (1997) : 『認識のレトリック』, 海鳴社.
- デイマー, T・エドワード. [著], 小西卓三 [完訳], 今村真由子 [訳] (2023) : 『誤謬論入門 優れた議論の実践ガイド』, 九夏社.
- 野矢茂樹 (2023) : 『言語哲学がはじまる』, 岩波新書.
- 森 雄一 (2001) : 「提喩および「全体-部分」の換喩における非対称性について」『日本認知言語学会論文集』 1, 12-22, 日本認知言語学会.
- (2019) : 「提喩論の現在」『認知言語学を拓く』, 215-35, くろしお出版.
- 山泉 実 (2010) : 「ドメインの統一による種で類全体を表す表現の分析」『日本認知言語学会論文集』, 288-98, 日本認知言語学会.
- Carston, R. (2002) : *Thoughts and Utterances: The Pragmatics of Explicit Communication*, Wiley-Blackwell.
- Croft, W. (2002) : The role of domains in the interpretation of metaphors and metonymies. In Dirven, R. and R. Pörings (eds.), *Metaphor and Metonymy in Comparison and Contrast*, Berlin/New York: Mouton de Gruyter, 161-205. [Former] Croft, W. (1993) : The role of domains in the interpretation of metaphors and metonymies, *Cognitive Linguistics 4-4*, 335-370, Walter de Gruyter.
- Fauconnier, G. (1997) : *Mappings in Thought and Language*, Cambridge University Press.
- Fauconnier, G. and M. Turner (2002) : *The Way We Think: conceptual blending and the mind's hidden complexities*, Basic Books.
- Kövecsses Z. and G. Radden (1998) : Metonymy: Developing a cognitive linguistic view, *Cognitive Linguistics 9-1*, 37-77, Walter de Gruyter.
- Le groupe  $\mu$  (1970) : *Rhétorique Générale*, Librairie Larousse.(邦訳) グループ  $\mu$  (著), 佐々木健一・樋口桂子 (訳) (1981) : 『一般修辞学』, 大修館書店.
- Peirsman Y. and D. Geeraerts (2006) : Metonymy as a prototypical category, *Cognitive*

*Linguistics* 17-3, 269-317, Walter de Gruyter.

本稿は JSPS 科研費（課題番号：19K13205）の助成をうけたものである。

- 
- <sup>1</sup> “代表する”ともいわれる。ただし文脈によってさらに個体が指示されることもある。
- <sup>2</sup> 比喩のもとになる形式。一方で、比喩の対象をターゲットという。
- <sup>3</sup> Croft の Domain 概念は認知文法の知見に由来するが、正体の知れない Domain 概念を分析の軸におきつづけることが換喩の基礎づけを困難にしているという Peirsman and Geeraerts (2006) らによる批判がある。
- <sup>4</sup> 種による提喩と換喩の類似性については後述する。
- <sup>5</sup> この推論において、十分条件にはならないにしても、必要条件としてかかわってくるのが Kövecses and Radden (1998) がしめした principles になるのだろう。
- <sup>6</sup> Type1 の条件によって種による提喩の大半は説明可能となる。これは、程度概念の例や数の提喩にも適用できる。つまり、“x が高さをもてば x は基準点から上方向の量をもっている”や“x が1であれば x はわずかな量である”といった具合である。
- <sup>7</sup> 本稿を執筆中に、このタイプの新たな用例として“滋賀のオスカル”（映画『翔んで埼玉～琵琶湖より愛をこめて～』予告編）という表現を目にした。
- <sup>8</sup> Q を“飲食店にいる”にまで拡張してラーメン屋から“スタバなう”と投稿する例を見たことがある。
- <sup>9</sup> したがって近年、“白ごはん”というレトロニムを見かけるようになった。これは、提喩が生じることで、“ごはん食べた？”が〈食事をした？〉しか意味しなくなったために、“白”をつけて区別をする必要が生じたわけである。
- <sup>10</sup> これは、類似性とカテゴリーの包摂関係以外の隣（近）接性にもとづく。
- <sup>11</sup> これが、原初的にはパラメーターつきの種による提喩の成立可否にかかわる。また、この選択には命名（記名）的な側面がある。つまり、はじめて接した商品の名前で類似の商品をよぶといった事例で、筆者の子どもは〈スポーツ飲料〉をすべて“ポカリ”と呼ぶ。これははじめて飲んだスポーツ飲料がポカリスエットで親がそれを“ポカリ”と呼んでいたのを覚えたからである。